

# ネット時代の学会誌



原 田 誠

今や、研究に必要な化学論文を探すために図書館へ出向くのは最後の手段になってしまった。まずはインターネットの Google 検索でキーワードとなる語句を入力し、検索を掛ける。すると Wikipedia を始めとする情報サイトやホームページが引っかかり、種々の論文誌も羅列される。「分析化学」の論文も検索サイト経由での閲覧が主流になってきている様子うかがえる。そのためか、「分析化学」のアクセス情報をとりまとめていると、時節柄と思われる現象に遭遇する。最も顕著だったのが、福島原発事故に関連する検索だ。「分析化学」では 2013 年第 62 巻第 6 号に原発事故を踏まえた特集「放射線と分析化学」を組んだ。この特集に限らず、以前に発表されていた放射性物質等に関する論文も福島原発事故以来急激に伸びた。これは国内からだけではなく、中国や韓国からのアクセスも伸びていた。そして特集記事では研究機関からだけではなく一般の方と思われるアドレスからのアクセスも増加した。最近はいろいろな情報を網羅したいいわゆるビッグデータの活用が様々な業種の企業で検討されているようだが、こういった論文誌からでも世間の関心事が読み取れる。

大学からのアクセスは年度ごとの行事に依存している様子うかがえる。例えば、新年度当初は非常に基礎的な記述が多く含まれる総合論文や総説などへのアクセスが増加する。その後夏休みに入るとアクセスは急速に減退し、修士論文や博士論文をスタートさせると思われる時期になると、序論などで引用するためなのか、再び基本的な議論を展開している論文のダウンロードが増加する。もっと詳細に検討すれば、「分析化学」のデータだけでもけっこういろいろなことが垣間見えるだろう。

「分析化学」では、著者の意識を高めることなどを目的とし、アクセス数上位を発表し、年間を通してアクセスの多かった論文を表彰している。ただ残念なことに、アクセス解析を行った結果、ある論文ではこのアクセス数を伸ばす目的なのか、10 個程度の限られたアドレスから数百、時には数千回ものアクセス・ダウンロードを行い、数を水増ししていたことが発覚した。編集委員会としてはこのような不正を見逃すわけにはいかず、集計方法を少なくとも一つのアドレスからは一月当たり一度のアクセスとしてカウントすることとした。できれば性善説に則った解釈をしたいところだが、実際にこういった不正を目の当たりにすると残念でならないし、論文内容も疑わしく感じられてしまう。

アクセス解析を行っている時、意外にダウンロードされる方がせつちかだということに気づく。ダウンロードする際に“ダウンロードボタン”を複数回クリックしたと思われるアクセスを非常によく目にする。「分析化学」のデータが置かれている J-STAGE のサーバ機能・能力の問題なのかもしれないが、PDF ファイルをダウンロードしている最中であることに気がつかず、まるでダウンロードをせつちかのようにカチカチとクリックしてしまい、結果として複数のダウンロードを実行してしまうのだろう。ブラウザをよく見ると、下の方にダウンロード中を示す表示がなされているはずなのだが。もちろん、これは“悪意のある行為”ではないが、アクセス解析を行う者としては苦笑いせざるを得ない。

すでに多くの論文が Web 発表を主体とする形態に変わりつつある。「分析化学」誌も近い将来、冊子体から脱却し、Web に絞る時期が到来すると思われる。より多くの方に新しい情報を速やかに発表できるということは大きな利点であるが、まだまだ乗り越えなくてはならない関は多く、編集委員会でも検討中であるが、できるだけ早期に実現したいと考えている。皆さまのご協力・ご助言をお願いいたします。

〔Makoto HARADA, 東京工業大学大学院理工学研究科, 「分析化学」編集幹事〕